

E-15 家具の扱いやすさについての人間工学的研究
(第2報)

——把持部分の材質と引上げ力との関係について——

佐保女学院短大 ○太田 昌子
奈良女大家政 花岡 利昌

1. 家具の扱いやすさについての人間工学的解明を試み、まず把持部分の大きさと引上げ力との関係を実験的に観察し、その結果を前回の総会において発表した。今回は同じく把持部分の材質と引上げ力との関係をみることにした。

2. 表面に椅子張布地、人造皮革、塗装鉄板、メラミン樹脂合板の4種をそれぞれはり付けた幅4cmの箱型試片について、19~20歳女子5名を被験者とし、右片手による引上げ力の時間的変化を比較観察した。また、これらの試片表面の硬さ、熱の伝わりやすさ、皮膚からの水分量、試片と手指との間のまさつ力等をそれぞれ比較測定した。これらの結果および被験者のフィーリング等をもとにして、表面材質と引上げ力との関係を考察した。

3. 最大引上げ力は4種共余り変らないが、引上げ持続時間に相違が認められた。比較的持続時間の長いのは塗装鉄板であり、次いで人造皮革とメラミン樹脂合板であり、最も短かいのは椅子張布地である。この順位は試片表面の凹凸とは関係がないように思われる。また前記各実験の測定結果との間にも、試片と手指との間のまさつ力実験を除き、相関は認めれなかった。従って表面の硬さや体温、汗などの存在も、ふつうの場合はまさつ力に大きな影響を持つとは考えられない。結局はそれぞれの表面材質と手の皮膚との間に、まさつ力に関する特有性があるといわざるを得ない結果となった。